

## 岐阜キリストン小史(46)―岐阜を訪れたイエズス会宣教師⑥―

### 岐阜における信長とカブラル(『カブラル書簡』より)(2)

今回から数回にわたり、『カブラル書簡』に記された信長との面談の様子を見ていきたい。訳文の全文掲載はできないため、ここでは信長の発言や振る舞いなど、重要と思われる箇所を中心に抜き出し、紹介したい。なお、訳文は岡美穂子氏の「フランシスコ・カブラルの長崎発書簡（1572年9月23日付）に見る岐阜」（岐阜市歴史博物館研究紀要21』2013年）より引用させていただいた。そのことをお断りしておく。

#### 1. 岐阜への到着と謁見

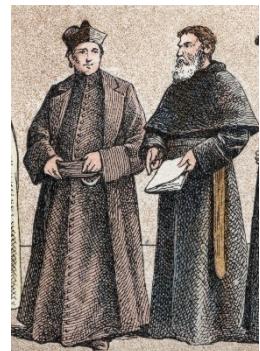
この書簡は、1571年にカブラルが九州から畿内へ旅した際の旅行記とも言える。

カブラル一行は、1571年10月21日豊後(大分)の白杵港<sup>うすき</sup>を出発、途中土佐の清水湊、紀州の紀之湊、堺を経て京都に至る。その後、琵琶湖を渡った。その後、大変な雪の中を4日間徒歩で進み、信長の居城がある岐阜の市<sup>まち</sup>に到着した。信長の執事を通じて訪問を交渉すると、信長は大名や領主からの使節がいたにもかかわらず、その日の予定をすべてキャンセルし、カブラル等一行にが自分と食事を共にするよう命じた。

#### 2. 織田信長の言動(1)

##### 謁見と信長の歓待

- 信長は一行の到着を知ると、すぐに重臣を遣わして一行に入室を命じた。
- 信長はカブラルらを近くに招き寄せ、厳寒の中、遠方から訪問したことをねぎらい、「大いなる慈愛の証である」と述べるなど、思いやりに満ちた言葉をかけた。
- 信長は一行の衣装に目をとめ、「なぜこれまでそのような衣装を着用してこなかったのか」と問い合わせた。それに対してロレンソは答えた。「これは我らの会でインドにおいて用いられている装束です。しかし、人々が初めて見て奇異に感じないように、これまで日本風に合わせた衣服を着用してきました。けれども今では、多くの地で我らは歓迎され、状況も確かなものとなりましたので、ものはやその必要はないと考えています。また、準管区長のカブラルが来日した際にすでに命令が下り、日本にいる我らの会員は絹布を着用しておりません。」信長はこの説明を聞き、「(イエズス会の)宗旨に即した方法で装束を考えたことは、まことに良い」と述べて評価した。
- ロレンソが仏僧と修道士の教えの違いを説明すると、信長はそれに大変満足し大いに拍手をし、「これらの者たちこそ、自分が探し求める明敏で正直な人々であり、日本の邪悪な僧侶たちとは異なる」と述べた。
- 信長は同行の信長の部下たち(この謁見の場には大身の者たちが大勢いた)に向き直り、「パードレたちが誠実で正直であることが分かった。まことにこれらのパードレたちと予の心は寸分の隙もなく一致している」と語った。
- 信長は立ち上がり、上等のイチジクなどの果物を乗せた皿をカブラルの前に置き、「食事の時間になるまで少しそれを食べよ」と言い、自ら最良のイチジクを手すから選んでカブラルに振る舞った。



イエズス会士の会服